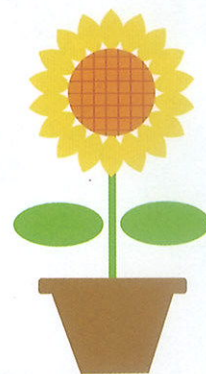


専修コミュニティ



このコーナーは育友会員の方々、教員、学生のコミュニケーションの場です。子どもから親への手紙、親から子どもへの手紙、ふるさと紹介、子どもの成長記などなど皆様からの寄稿により成り立っております。皆様の寄稿をお待ちしております。是非ご参加下さい。

詳しい応募の仕方は 38 頁をご覧ください。



教員寄稿 〈シリーズ〉 私は、今の学生をこう捉えて、こう接する

悩めない学生を悩める学生に ～感じ、考える力を養う授業～

経済学部講師 角田 真紀子

つのだ まきこ

担当科目はスクールカウンセリング、人間発達研究概論、発達・学習心理学など。主な著作・論文等は、[学術論文]多重焦点法を用いた予防カウンセリングの実践事例—授業「総合心理入門」における心理的体験の構造化—[東京大学大学院教育学研究科紀要 45] (H18)、[学術論文]多重焦点法による学校内コラボレーションの実践展開 [東京大学大学院教育学研究科紀要 44] (H17) ほか。



授業でバンザイ

私が担当している授業のひとつは「発達・学習心理学」。教職課程を履修している学生の必修科目です。年度によりますが、私はたいていその授業の初回から第4回目くらいまで開始の号令をかけます。その際「起立・礼・バンザイ・着席」と言います。学生は、大学で起立をしたことがなく、ましてバンザイが入った号令を聞いたことがないので一瞬止まったり驚いたりしますが、何となくみんなに合わせてその通りにやります。この感想を書いてもらうと、最初は「驚いた」「バンザイにはどんな意味があるか教えてほしい」「意味を知りたい」「中・高を思い出して懐かしかった」「授業が始まるという感じで切り替えができた」「眠気が取れ

た」「楽しかった」というものが多く、2・3回目になると「慣れた」「この授業が始まるという感じ」「飽きた」「面倒」「すっきりするので良い」が目立ち、4回目にはすっかり定着して、意味を知りたいという学生は減ってきます。

ところが5回目になると私は号令をかけるのをやめます。そうすると立ち上がろうとしていた学生は拍子抜けするようです。「なぜバンザイをやらないのですか」「バンザイはどういう意味があったのか知りたい」「なくて寂しい」という感想を持つ学生もいます。

なぜバンザイをして、そしてやめたのか

私は学生に号令をかけたいわけではなく、バンザイ

をさせたいわけでもありません。実際、私は学生時代一度も号令のある授業は受けたことがありませんでした。

実は、この一連の行動は普段意識せずに行っている「学習」のプロセスをあらためて体験的に学習してもらうために行っている仕掛けです。授業を進めていくと、このプロセスを理解するヒントとなるような理論を学びます。しかしこの時点では学生はその理論とこの体験を結びつけることはほとんどできません。そこで質問をしたりテストをしたりしてこの行動のプロセスや意味を尋ねると気づきます。なかには、「このテストのためにバンザイをしていたのですね」という学生もいます。そう言われればそうだけれども、そうではありません。理論が実践と結びついていることや、疑問に思ったことを考える手がかりが理論を含め授業や生活の中にあるということを学び、自分で考えるということによって、その学習内容が意味を持ち、加えて定着するということを理解してほしいのです。この体験に含まれる意味はひとつではなく、答えもひとつではありません。また、この体験は、教育を行う上での留意点についても考えてもらうきっかけにもなります。

悩めない学生

学生に限ったことではありませんが、人はさまざまな悩みを抱えています。‘悩んでいる’学生は授業の前後にほんの少し、あるいはたつぷりと相談をしにやってきます。ある学生は学期が始まって間もない4月末の授業後に「何か死にたいんです」と言ってきました。すぐに何とかなる話ではなさそうなので場所を移してゆっくり話を伺うと、本当に死にたいわけではなく「何となく死にたくなる」気持ちになるということでした。学生とは継続的に面接をする約束をし、1年間毎授業後に会って話をしました。

このような「何となく」悩んでいるという学生は多くいます。同様に多いのは「彼女とケンカしたんですけどどうすればいいですか」「将来が分からないんですけどどうすればいいですか」というような、答えを求める学生です。大人でも「子どもが不登校なんですけどどうすればいいですか」など、「どうすればいいか」を多用する人は多くいます。私は預言者ではなく、人生の達人でもありません。もし答えがすぐ導き出せるようなものなら、すでに本人がどうにかしていることでしょう。そこで、私は彼らと時間をかけて向き合います。そしてまず何がどうなっているのか、どう感じているかを一緒に確かめ、何が悩みなのかを見出していきます。そうすると本人は初めて何に困っていて何に悩んでいたのかが分かり、きちんと悩む、つまり問題に対

して考えるという状況に至ります。場合によっては「悩みだと思っていただけそうではなかった」ということもあります。いずれにしても、学生は何かについて悩んでいる時、それを丸投げしてくれることがよくあるので、一緒に「感じ、考える」ということをしています。

悩み、感じ、考える力を養うために

現代社会は、情報社会です。知りたいことはパソコンで一発検索が可能。メールやtwitterなど、瞬時にやりとりをしてあらゆる疑問の答えを知ることができます。コンビニや自販機は至る所にあり、すぐに食べ物や飲み物が手に入る。どんなことでもほとんど我慢をする必要がありません。そういうなかで育った子どもたちは何かを要求したらすぐに充足されるということを知っている、すぐに答えが手に入らない問題にあたると容易に崩れてしまうことがあります。特に自己や対人関係の問題はそうです。彼や彼女とどうなりたいか、自分が何になりたいか、というような問いの答えは自分の外にはなく、自分の中にあるという確証はありませんが、多くの情報に翻弄されながら自分（たち）で見出していかなければならない問題です。それは、欲しいものがすぐ手に入ってきた子どもたちにはとても困難で苦しい作業となります。

特に考える力、というのは何か不足している時に身に付くもので、満足している時には身に付きにくいものです。たとえばかつては幼児が「月にウサギはいるの?」と尋ねたら、大人は「どうかな、見に行ってみよう」とか「お餅をついているね」と言ったかと思います。これは事実ではありませんが、この曖昧さや「嘘」によって子どもは想像力を膨らませ、いつか問いの答えを見出すということを時間をかけてすることができました。しかし今は情報がたくさんあって「いない」と簡単に分かってしまうので、問い自体がたちにくく、想像したり考えたりする機会もあまりないように思われます。これは子どもの責任というよりは、このような機会を結果的に奪ってきた大人の責任とも言えるのではないのでしょうか。

授業では、人生とは直接関係のないたわいない疑問からやがて自分に関わる疑問までを考えたり、気持ちを感じるように、質も大きさもいろいろな仕掛けをちりばめています。そして自ら答えを見出したり、新たな疑問を見出したりするような、知識だけでなく感じ考える力を育てる展開を心がけています。学生は真面目です。素材を提供すれば多くの学生は興味を持って取り組みます。私自身も日々感じ考え発見しながら、学生と接しています。